日本古写経の特質

落合俊典

（国際仏教学大学院大学教授）

ここで述べる「日本古写経」とは、大陸・半島から伝来した仏教の書写経巻を底本として写経されたものを指す。聖語蔵本の隋唐巻とされるものは厳格な意味で対象外であるが、これらが底本となったことを考慮すると貴重な資料に他ならない。

また平安・鎌倉一切経は概ね奈良写経の転写本であるが、中には開宝蔵（北宋勅版・蜀版）を底本としたものもあり、純粋な意味で日本古写経とは言えない。しかし一切経（写経本・刊本）の伝来や流布を考究する上で重要な資料となっている。

平成 12 年（2000）より金剛寺一切経（約 4,600 巻）・七寺一切経（4,954 巻）・興聖寺一切経（約 5,300 巻）等の平安・鎌倉一切経が撮影され、データベース上で順次公開されつつあるが、アップされた総数は 1 万 1 千巻に達している。1 巻の平均画像コマ数を 25 とすると 27 万 5 千画像になり、諸経を比較検討する上で極めて有意義なデータベースである。

現存する奈良写経の総数は概略 2 千巻と言われている。これに比して平安・鎌倉一切経は数万巻になると想定されるが、それらの由来については未詳のままであった。近年、奈良写経、特に五月一日経などの勅定一切経の研究プロジェクトが開始されてから奈良写経と平安・鎌倉一切経との関係が具体的に見えてくるようになってきた。一例として国宝本『金剛場陀羅尼経』（686）と五月一日経本（740）および平安院政期の七寺一切経本や石山寺本などを取り上げ、本文を仔細に検討していく。すると日本古写経の系譜が明確になってくるのである。

また日本古写経には大正蔵本（底本：高麗再雕版。対校本：南宋思渓版・元版・明版等）とは異なる文言や表現が散見するが、これは刊本系統の大蔵経と異なる系譜にあるからこその相違であった。つまり、今後の日本仏教の研究においては、少なくとも鎌倉時代まではテクストとして大正蔵本よりも日本古写経を参照することが望ましいということである。